

「楽しい！」を作る 動くおもちゃ作りプロジェクト 活動報告

1. プロジェクトの概要と計画

当プロジェクトでは、支援者の「あったらいいな！」を形にし、操作によって動く・光る・音が鳴るなどの機能を備えたおもちゃや支援グッズを作成することで、障がいのある子どもたちの「楽しい!」「うれしい!」を引き出すことを目指す。

県内の児童発達支援センターの職員からおもちゃや支援グッズについてのアイデアや要望を募集し、完成したおもちゃや支援グッズは、実際に職員や子どもたちに使用してもらう。

2. 活動内容

【情報収集・アイデア集約】

書籍等をもとに、障がいのある子どもの力を活かすスイッチ制作や支援グッズについての情報収集を行った。また、協力機関である児童発達支援センターあかしの職員に聞き取りを行い、「こんなおもちゃがあったらいいな」というおもちゃ・支援グッズのアイデアを収集した。

【おもちゃ第一弾作成】

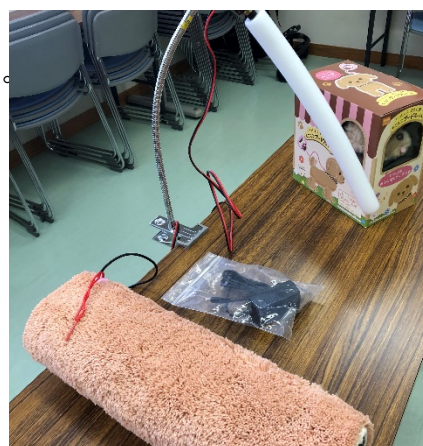
収集した情報や、職員から得たアイデアをもとに、団体メンバーで作成するおもちゃを決定し、作成を開始した。おもちゃ作りには、本プロジェクトへの参加を希望した不登校で鳥取大学臨床心理相談センターに通う中学生1名も、保護者の承諾を得て参加した。第一弾では、下記のおもちゃ①②を作成した。

おもちゃ①

スイッチ操作で、犬のぬいぐるみが音を鳴らしながら動くおもちゃ。
「ボタンを押す」というスイッチ操作が難しい子どももいるため、「触れる」「動きを感知する」など、3種類のスイッチを作成し、子どもの状態や引き出したい力に合わせて選べるようにした。

おもちゃ②

CD ラジカセなどと連動して音が鳴ったり振動したりし、身体全体で音や振動を楽しむことができるおもちゃ。



【完成品第一弾の贈呈、第二弾のアイデア聞き取り】

団体メンバーとおもちゃ作成に参加した中学生が児童発達支援センターに伺い、完成品の贈呈と使用方法の説明を行った。児童発達支援センターの職員の方からは、感謝の言葉とともに「子どもたちの反応が楽しみ」「はやくこのおもちゃで遊ぶ時間を作りたい」という嬉しいコメントをいただいた。その後、実際に発達支援で使用しているおもちゃや支援グッズを見せていただき、「次にこんなものがあるといいな」というおもちゃ・支援グッズ作成のアイデアをいただいた。

【おもちゃ・支援グッズ第二弾作成、贈呈】

職員の方々からいただいたアイデアをもとに、第二弾のおもちゃ・支援グッズを作成し、贈呈した。

第一弾の作成時に参加した中学生1名は、引き続き作業に参加した。この取り組みを進める中で、中学生自身も様々な障がいのある子どもたちが遊べるおもちゃや支援グッズにより興味を持ち、「これを作りたい」「職員さんからおもちゃの改善点を聞いて改良したい」と積極的に意見を出すなど、意欲的な様子で作業に取り組んだ。作成したおもちゃ・支援グッズは以下の通りである。

おもちゃ③

スイッチを操作すると光るおもちゃ。

支援グッズ①

VOCA（音声出力型コミュニケーション支援機器）

あらかじめ音声を録音しておき、子どもがボタンを押すと音声再生され、意思を伝えることができるコミュニケーション支援グッズ。



3. 活動の成果

今回のプロジェクトを終えて、児童発達支援センターの職員の方からは、「子どもたちに自分でおもちゃを操作する楽しさを伝えられて嬉しい。」「あったらいいのになと思っていたものを形にしてもらえて、とてもありがたい。」「中学生の子の特技が活かされていて、本当にすごいと思った。」など、好意的な感想を多数いただいた。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、子どもたちがおもちゃで遊ぶ様子を直接見ることはできなかったが、実際におもちゃや支援グッズを使った時の様子を職員の方から伺う機会を設けるなど、工夫をしながら取り組みを進めることができた。

また、プロジェクトに参加した中学生についても、第二弾の作成時には「こんなものを作りたい」と、意欲的に取り組む姿が見られるなど、様々な変化があった。自分の特技を活かして作ったものが誰かの役に立つという経験が、意欲や自信につながったのではないかと考えられる。

今回の取り組みを通して、児童発達支援センターを利用する子どもや、職員にとっての「楽しい！」「うれしい！」を引き出しただけでなく、中学生にとっての意欲や効力感を引き出すことができた。